
赤い鳥症候群（仮題）

漣 連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鳥症候群（仮題）

【Nコード】

N0818Z

【作者名】

漣 連

【あらすじ】

僕の名前は天城夕^{あまぎゆう}。ちょっと有名な病気に体を蝕まれた、ごく普通の16歳だ。突然だけど、こうして記録を残そうと思う。何故なら 僕の命はあと数日で終了するからだ。どうやら、病気は僕の命の灯を吹き消すほどの距離まで近づいてきたらしい。というこ
とで、後々の為にこれを残す。何年後か分からないけれど 将来、再び僕が目覚める、その時まで。このノートが残っていますように。
。

プロローグ（前書き）

SF物の予定。書けるかどうか今から不安しかありませんが、温かい目をお願いします。また、感想、評価等大歓迎です。酷評でも構いませんのでよろしくお願いします！

プロローグ

たとえ幾星霜の

時が流れたとしても

私は君のことを忘れない

たとえ千太陽が

昇ったとしても

私は君のそばにいるよ

君が孤独で凍えそうになったら

一緒に居てあげる

君は独りじゃないよ

すぐにそこに飛んでゆくから

とある建物の屋上。そこに、一人の少女がいた。目を閉じながら時に強く、時に弱く、抑揚を付けながら歌う。

と、少女が歌い終わった時、後ろからパチパチと拍手が聞こえた。

「お前は、その歌が好きだな。何か理由があるのか？」

少女の仲間であるその男は少女に近づいて、前々から疑問に思っ

ていたことをぶつける。

少女は男に向き直り、感情の起伏に乏しい声音で答えた。

「約束、だから」

「約束？」

「うん」

少女は頷きながら空を見上げながら手を伸ばす。

「大事な、約束」

「ね、夕」

そっと、宝物のように呟いた。

第一話『宣告』

そこは、一面真っ白な部屋だった。僕は簡素な患者服を着てベッドの横につけられた車イスに乗る。自分の手で車輪を回しながら僕は自分の担当医の部屋へと向かった。

「ああ、天城君。こっちおいで」

部屋に入るとパソコンの画面を難しい顔で睨めっこしている先生がいた。自動開閉ドアが開く音で俺が入って来たのに気付いたようで、画面から僕に視線を向ける。

「仙台先生、新しい患者さんですか？」

先生は頭を掻きながらはは、と苦笑する。

「まあね。やっぱり、病院内の医師の人数が少ないから、自然と一人が受け持つ人数も増えてしまってるね」

そう言って先生はくるり、と椅子を回転させて僕と向き直った。

「それで、天城君。君には大事な話があるんだ」

僕は半ば予想していた言葉に、先生が続けるであろう言葉を先んじて言った。

「もう、長くはない、ですよ」

先天性福山型筋ジストロフィー。

それが僕の体を蝕む病氣の名だ。大抵の人は筋ジストロフィーという名前だけ知っている人が多いだろう。筋ジストロフィーは簡単に言えば筋肉が次第に衰えていく病氣で、呼吸器感染や心不全が主な死因に繋がる。もちろん治療法はまだ、無い。

僕はそれが先天的に発症し、今までの間ずっとこの病院の敷地内で過ごしてきた。僕も薄々感じていたことで、「あ、もうすぐ死ぬだろうな」と、ある日突然思った。野生の勘、というやつなのかも知れない。

先生は悔しそうに何か話していたが、僕はほとんど聞いていなかった。話も終わり、僕は部屋に戻りながらふと思う。明日来る友人たちに、何と言えいいだろうか。それが目下の悩みだった。

次の日、いつも通り友人たちがお見舞いにやって来た。狭山浩二と笹山菜月。どちらも僕の幼馴染だ。浩二は今時の高校生、という恰好をしていて髪を茶色に染めている。わざわざ髪を染めても大丈夫な高校を受験したそうだから、よっぽど髪を染めたかったんだろう。指定の制服を軽く崩していて、見たまんまのやんちゃな高校生だ。

一方菜月は清楚な佇まいをした女の子で、前髪をヘアピンで止め

ている。かわいい物好きで今日はアヒルのヘアピンだった。二人は同じ学校に通っていて、その帰りにいつも寄って行ってくれている。

菜月は買ってきてくれた花を花瓶に活けながら口を開いた。

「夕君、また入院している女の子に告白されたんだって？人気者だね」

「何？お前また告られたのかよ。まったく、相変わらずだなお前は」

浩二は僕にヘッドロックをかけながらじゃれてくる。いつも通りの光景。僕は自分がもうすぐ死ぬことを伝えるべきか否か迷った。

きつと、僕が死ぬということを知ったら、この気の優しい友人たちは悲しむだろう。僕個人としては、出来る限り友人たちの悲しむ顔は見たくなかった。

が。

「もうすぐ、死んじゃうん…だよな？」

「!？」

突然、菜月は何の前触れもなく言った。僕が驚いて目を白黒させていると、浩二がため息を付きながらパイプ椅子にもたれかかる。

「先生から聞いたんだよ…ま、その様子だと俺たちに伝えようか迷ってたってところか？」

「確かに悲しいけど…私はちゃんと知れてよかった、って思うよ。だって、知らないまま夕君が死んじゃったら後悔するもん」

僕は、二人の顔をまともに見れなかった。恥ずかしいし、悲しいし、気を遣わせてしまったことが悔しいけど　うれしかった。

「ごめん、二人とも。それと　ありがとう」

穏やかな空気が僕たちの間に流れる。すると、部屋に先生が入ってきた。

「やあ、君たち。いつもありがとう、天城君のお見舞いに来てくれて」

そう言って先生は僕に向き直る。

「それで…決めてくれたかい？昨日の話は」

「昨日の…？」

僕はそう言われて全然話を聞いていなかったのに気付いた。

「すみません…何の話でしたっけ」

「…はあ、やっぱり聞いていなかったのか。上の空だったからもしや、と思ったが。じゃあもう一度言おうか　クライオニクスを、受けてみないかい？」

クライ…オニクス？

何ですか、それ？

第一話『宣告』（後書き）

2011/12/4 訂正

一人称がバラバラというまさかの失態。下書きの時点で変えたのを忘れていました…。

第二話『クライオニクス』

「クライ…オニクス？」

「そう、クライオニクス。まあ、簡単に言えば人体冷凍技術、と言ったところかな」

クライオニクス。

死んだ直後の人体を冷凍保存し、医療技術の発展した未来に復活の望みを求める、と言うものだそうだ。しかし、冷凍時や解凍時の細胞破壊を克服する技術的ブレイクスルーが必要とされることや、既に破壊されてしまった細胞の復元は非常に困難であることから、実際に復活するかどうかについては悲観的や否定的な意見が多い。

あえて比較するならコールドスリープは架空の技術だが、クライオニクスは（様々な問題があるものの）既存の技術である、ということか。また、コールドスリープは生きている人体が対象であり、クライオニクスは亡くなった後の人体が対象である。

「今は無理でも、10年20年、50年先では君の病気を治すことが出来るかもしれない。僕の知り合いにクライオニクスを研究している人物がいてね。君のことを話したら、ぜひ力になりたい、って言ってね。無理には進めないけど…どうかな？」

僕は先生の言葉に心が揺すぶられるのを感じた。どうしようもなく諦めていた、この病気が治る可能性がある。

でも、実際にはそう都合よく話は進まないだろうと思う。何年経ってもこの病気の治療法が見つからないかもしれないし、そもそも、解凍技術自体が確立されるかどうかも謎だ。

いわば、ゴールを知らされないまま長距離走を走らされるようなもの。正直、気が進まない。それに、未来には　この友人たちが生きていないかもしれない。はたして、僕は孤独に耐えられるだろうか。

「…少し、考えさせてください」

僕は、そう答えるしかなかった。

僕は気分を変えるために病院内に造られた庭に来ていた。庭、と言っても花畑が一面に敷き詰められている、という訳ではなく森の中で患者が息抜き出来るようにと造られた場所だ。

この病院はそれが売りにもなっていて、精神的な疾患を抱えた人も多くやって来る。僕は暇があればいつもここに来ている。浩二と菜月には学校があるから毎日見舞いに来ることは出来ない。とは言っても、他に友がいらないわけではない。

僕はいつもの場所に車いすを停め口笛で合図を送った。パタパタ、と何かが羽ばたきながらこちらに近づいてくる音。僕はそっと人差し指を伸ばして友を迎えた。

「やあ。今日もいい天気だね」

チチチ、と指先から返事がする。僕の指に乗っているのは赤い羽毛をした小鳥だった。この小鳥は、妙に僕に懐いていて僕がここにやって来ると必ずやって来る。赤い羽毛をした鳥なんて名前が思い当らなかったから図鑑で調べてみたけど、一向に名前が分からなかった奇妙な奴だ。

先生に聞いてみたが、もしかしたら突然変異でこの色になったかもしれない、とのこと。

閑話休題。

とにかく、僕はこの小鳥が病院内では唯一の友達だ。寂しい奴、とは自分でも思うが小さいころから病院に居た所為か、少々内向的なのだ。それにいずれ死んでしまうのに、と考えてしまつて友達を作るのに躊躇いがちになつてしまつた。だから、友は浩二と菜月、それとこの小鳥だけだった。

「ねえ、聞いておくれよ。実はさ、俺の病気が治るかも知れないんだつて」

僕はいつものように小鳥に呟く。

「でも、それはいつ目覚めるか分からないままずっと眠り続けなきゃいけないんだ。もしも、未来でこの病気を治す方法が見つかったとしても、そこに知っている人は誰もいない。独りぼっちだ」

空いている掌で目を覆う。

「僕は、どうすればいいのかな……？」

第二話『クライオニクス』（後書き）

夕は、勿論病気が治る見込みがあるならクライオニクスを受けてみたい、と考えています。

しかし、もしかしたら未来で自分は独りぼっちになってしまうのではないか…という不安で足踏み状態。

果たして、夕の決断は…？

第三話『決意』

「僕は…どうすればいいのかな…」

僕は指先に乗る小鳥に弱音を吐く。

掌で目を覆っていると、スッと指先から重さが消えた。そして。

「いたっ。い、痛い痛い！つつかないで！」

僕は小鳥に頭をつつかれていた。僕は必死になって頭を庇う。けれど、小鳥はそんな僕なんてお構いなし、と言わんばかりにつつきまくる。

「す、ストップストップ！僕は病人なんだよ！？つつくにしてももうちょっと手加減してよ！あいたっ！」

僕の必死の抗議は聞き入れてもらえなかった。腕の筋肉がもうほとんどないから上げるだけでも重労働で、もう息が上がってしまった。

「分かった！分かったから！クライオニクスを受ければいいんですよ！？」

と、僕がやけくそ気味にそう叫ぶとピタリと嘴での猛攻を止めてくれた。

「た、助かった…」

さっきのやり取りもそうだけど、この小鳥は時々言葉が分かるんじゃないか、と思う時がある。僕の言葉にいちいち反応しているから、もしかとは思うけど…。

「ほんと、君は不思議な奴だね。…けど、君のおかげで決心がついたよ。やっぱり、僕は生きたい。そりゃあ、独りは不安だけどさ、まだ浩二や菜月が死んだ未来って決まったわけじゃないもんね。…まあ、流石に二人はおじいちゃんおばあちゃんになっているかもだけど」

僕は二人の皺くちやになった顔を想像して、くす、と笑う。

「ありがとう」

そう言って僕は病院に戻って行った。

僕は病院に戻ってすぐに、先生にクライオニクスを受ける、と言った。先生は何だか複雑な顔をしていたけど、「分かった」、とだけ言っただけで相手方に電話をしに席を立った。

それからあれよあれよと話が進んで、僕がクライオニクスを受ける準備が整った。と言っても、クライオニクスは死んだ人体を冷

凍するわけだから、僕が心肺停止状態になって初めて受けれるのだ
けど。

僕はクライオニクスの手順の説明を聞いたり、浩二や菜月と話を
したりと穏やかに過ごした。

今までしていた投薬やトレーニングもストップしたから、目に見
えて僕の筋肉は衰えていった。前までは自分で車いすを押していた
けど、今はもう腕を上げるだけでもつらい。

僕は看護師さんに頼んで例の庭に連れて来て貰っていた。

爽やかな風が髪を撫でていく。目を閉じていると、肩に何かが乗
る気配がした。

「やあ、君か」

そこにいたのは、あの赤い小鳥だった。首をかしげながら、僕の
目をじっと見つめている。

「やっぱり、野生の動物はそういうのに敏感なのかな…？ありがと
う、最後に来てくれて」

と、その時。小鳥は高い声でさえずりながら歌い始めた。

（本当に、変な奴だな…欲しい時に、欲しいものをくれる。僕は、
君がいたから、独りでも寂しく、無かった…。ありがとう…僕の、
友達）

そうして

僕はゆっくりと、睡魔に押されるまま。

永い永い眠りについた。

第三話『決意』（後書き）

こうして、夕は眠りにつきました。

彼が目覚めるのはいつたい何年後なのでしょう？

第四話『解凍』

「……そ……めざ……だ……」

なんだろう。声が聞こえる。まるで切れたカセットテープみたいに声がぶつ切れた。

僕はまだ眠いんだ。起こさないでくれよ。

しかし、僕の思いとは裏腹に周囲から聞こえる雑音は増してゆく。そして、とうとうクリアになった聴覚が、聞き覚えのない男性の声を拾った。

「さあ、起きるんだ。天城夕君」

その声で。

僕は永い眠りから目覚めた。

「……じじは？」

僕は薄ぼんやりとしか視認できないことに内心首を捻りながら身を起こした。でも、その瞬間に違和感が脳裏をよぎる。

（身を…起こせた？筋肉がほとんどないのに…？）

僕は自分の身に起きた正常に軽くパニックを起こしかけながらも体中に意識を巡らせる。

（…うん。なんともない。体が自分の物のように動かせる。一体何が…？）

と、僕が思考に没頭していると先程聞こえた男性の声がした。

「天城君、考え事もいいけどそろそろこっちに気を向けてくれるとうれしいんだけど…」

「はい？」

顎に当てていた手を外して声がする方を仰ぎ見る。そこには、眼鏡をかけた柔和な表情をした男性がいた。

「あの…どなたですか？」

「あ、これは失礼を。私、人体解凍技術部門研究室の室長を務めている斉藤と言います…じゃなくて！天城君、覚えてないんですか！？」

えーと…？確か、昨日は今まで通り起きて、庭に行っ…。
死んだんだ。

僕は、自分が？死んだ？という事実にはショックを受けた。

そうだ、僕はあの時、確かに死んだと思う。だとしたら、ここはどこだ？

機械だらけのこの部屋が、どう見たって天国だとは思えない。だ
としたら

そこまで考えて、先ほど齊藤さんが言った言葉とある知識が完全にかみ合ったのを感じた。

僕は、恐る恐る尋ねてみる。

「あの……今つて、西暦何年ですか……？」

齊藤さんは眉間にしわを寄せながら言いくそな表情をする。

「えーっと。今は、西暦2161年です。つまり、君の生きていた死んでしまった時から、150年経ちました」

え？

[illegible]

第四話『解凍』（後書き）

やっ
ちやっ
たぜ

第五話『遺伝子操作薬』

真っ白な病室。僕にとっては見慣れた光景。絶望と諦観が入り混じった中、いたずらに日々を？消費？するだけだった日常が、今は心がウキウキして止まらない。

何故って？それは勿論

2161年の現代には、筋ジストロフィーを治す薬があるからだ。

話は少しまき戻る

「150年？」

「ええ、150年です」

僕はあまりもの衝撃で開いた口がふさがらなかった。だって、考えてみて欲しい。こちらの体感時間はほんの一瞬だ。例えばそれが死んでいた。斉藤さんが言うには仮死状態になっていたらしい。そう言う風に加えて処置されたそうだと。状態だったとしても、目を覚ましたら150年たっていた。

こちらとしては浦島太郎と似たような状態である。正直、理解が着いて行かない。

「まあ、タイムマシン　いや、タイムカプセルと言った方がいいかもしれませんね。あなたは所謂タイムカプセルによって運ばれたタイムトラベラーという訳です。早速で悪いんですが、移動をして貰いましょう。体に異常がないか検査をしなければ」

僕は斉藤さんの言葉でさっきからある、不安にも似た違和感について聞いてみた。

「それなんですけど…なんで先程から僕の体はこんなに動かせるんですか？筋肉はほとんど無くなっていた筈なんですけど…」

「ああ、そのことですか。あなたから見えないですが、今あなたの脊髄に特殊な電極を埋め込んでいます。それによって筋肉に刺激を与え続けることで筋肉が衰えないようにしているんですね。その処置をしたのが約100年前です」

なるほど…僕はその言葉に肯けるものがあつた。確か、クライオニクスを受けることが決まった時に説明があつた。その時聞いた話だと、冷凍保存するにあたって問題がいくつかある。解凍技術もその一つだが、クライオニクスは？死んだあと？人体を冷凍する。つまり、解凍しても死後硬直が続いたままだということだ。

電極を脊髄に埋め込むのはそれを素早く無くすために埋め込むんだろう。オマケで電極によって筋肉が一時的に活性化しているから体を動かせる、という訳か。

僕は一応安堵して、気になっていたことを質問した。

「僕がこうして解凍されたっていうことは、筋ジストロフィーを治す方法が見つかった、と思ってもいいんですか？」

「ええ、その通りです。まずはそのためにも検査をしないと…それでは行きましょうか」

僕は体を少しふらつかせながらも、誰の手も借りずに自分の足で歩いた。

そのことがとてもうれしかった。

という訳で今に戻る。

僕はあてがわれた病室で血液や臓器、脳の検査を受けながら半日を過ごした。2161年には、いちいち検査をする機械がある場所

まで移動しなくとも、自分の病室で受けれるようになっていらい。流石に手術は手術室で行っているそうだけど。

検査の結果は30分後に出るそうだ。僕は空間に表示されたタッチディスプレイ（！？）を操作しながら暇を潰した。

やっぱり、150年という月日は冗談でも何でもないようだ。こうしてテクノロジーが進歩しているのを様々と見せつけられると、自分が本当に未来に来たということが実感できる。

（次は…と。検査結果の報告後、本格的に治療開始か。でも、これどうやって出力してるんだろ？ホログラム…は実体が無いだろ。これが未来技術か…）

と、微かにしか聞こえないスライド音と共に病室の扉が開いた。カルテを覗きこみながら斉藤さんが僕が寝ているベットの横に近づいて口を開いた。

「うん…特に異常はないね。筋肉が平均より下回っているくらいで、他は健康そのものだ。これなら、GCMが使えるな」

「GCM…って何ですか？」

「ああ、天城君は知らなくて当然か。GCM 遺伝子操作薬のとき。これは、薬に含まれるナノマシンが特定の遺伝子だけを組み替える、というものでね。これによって世の遺伝子疾患の40%が治療可能になったんだ。筋ジストロフィーの場合は、筋肉が衰える、という遺伝子配列だけを組み替えるだけでいいからね。これ以上効果的な薬は無いと思うよ」

僕はそれを聞いてあっけにとられた。…ていうか、進歩しすぎじゃない？ 遺伝子操作って。

「いや、そうでもないよ。天城君がいた2011年でも、遺伝子操作自体はさほど珍しいものじゃなかったはずさ。米の品種改良とかと同じだよ。それを、人体まで段階的にステップアップしていったのさ」

そうですか…それならいいんだけど。…いいのか？

「GCMはオーダーメイドみたいな物だからね、君の他の遺伝子に悪影響を及ぼさないようにしないと。少し作るのに時間がかかるからね」

そう言って斉藤さんは部屋から去っていった。

本当に、筋ジストロフィーが治る見込みがあるなんて…夢みたいだ。

試しにと頬をつねってみた。痛かった。

第五話『遺伝子操作薬』（後書き）

詳しい原理などは流石に説明できないのでパスで…（＜＞）

GCMは、genes control medicine の略です。

英語はあまり得意じゃないので、もっとちゃんと適した単語がある、と言う場合は教えていただけたらうれしいです。

第六話『退院』（前書き）

投稿が遅くなってしまつて本当に申し訳ありません。

数日の間風邪をひいてしまつて寝込んでしまつていました。みなさん、コタツの中がいかにも居心地がいいからと言っても、腹を出したまま寝てはいけませんよ（実話）

第六話『退院』

僕が遺伝子操作薬を服用し始めてから三週間経った。なんでも、少しずつ遺伝子を変化させないと体に予想外の異変が出るかもしれない、とのこと。

実際、僕の筋肉は日が経つにつれて少しずつだが量が増えていつている。斉藤先生も経過は順調、と微笑みながら言っていた。最近では150年ものギャップを埋めるための勉強や、リハビリなどに精を出している。

今は、現代 2161年までに何があつたか講義を受けている。

「君が眠っていた150年間、それは激動と言つていい時代でした。天城君が服用している遺伝子操作薬は勿論、たくさんの新技術が開発された時代でもある」

そう言いながら斉藤先生はタン、と教鞭を叩いた。

「さて、今回は遺伝子技術の事について詳しく説明しましょうか。もともと、この技術が医療現場まで上がってくるのは否定的な医者が多かった。倫理的な観点でね。しかし、君のように遺伝子疾患を抱えた患者はそれこそ世界中にいる。彼らを治す術がないからと言って放っておくのは我々医者には出来なかった。だからこそこの技術は必要だと訴える一人の医者がいたのさ」

なるほど、僕もその一人だからよく分かる。遺伝子疾患には治療法が確立されていない、というのがざらだった。今こうして治療を

受けられるのもその人のお蔭と言っても過言ではないだろうな。

「その医者の名前は狭山浩二。遺伝子医療の先駆者であり、遺伝子操作薬の骨子を作り上げた人物だ」

「ええっ!？」

こ、浩二!?! 本当に!？」

「さ、斉藤先生、本当に、狭山浩二なんですか？」

斉藤先生は頷いた。

「ああ、本当だとも。知り合いかい？」

「知り合いも何も浩二は幼馴染ですよ!」

本当に驚いた。僕が眠っている間に、教科書にも載るような偉人になってしまったらしい。斉藤先生も僕の言ったことに度肝を抜かしていた。

でも、浩二が遺伝子医療の必要性を説いたっていうのは、ほとんど僕の為ではなかったんじゃないかと思うのは、出来過ぎた話だろうか。もう80年も前に死んでしまったそうだから、真相は誰も知る由はない。

ただ、独りぼっちだと思っていた中、知人の名前を聞くというシチュエーションには何だか勇気づけられるものがあつた。

「オホン、話の途中だったね。狭山浩二は遺伝子医療の必要性を説

いた、という所までだったかな。彼は学会でそのことを発表しながら研究に熱心に取り組んだという。そしてついに、彼は遺伝子操作薬の理論を書き上げた。その時に誘拐事件やらがあつたのだが…それはまたの機会にしようか」

浩二…当時は色々と面倒事に巻き込まれたようだ。僕は、もし退院したら浩二の墓を参ろうと決めた。

「そうした紆余曲折がある中、遺伝子操作薬は完成した。そうして今現在、世界中の遺伝子疾患を患っている人々の希望としてあり続けている、という訳だ」

こうして斉藤先生の講義は終わった。今日はとても有意義な一日だったと思う。

そうした日々を過ごし

僕が目覚まして2か月。

僕は退院を告げられた。

第七話『襲撃』（前書き）

連続で投稿しました。

少々急展開すぎるかもしれませんが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

第七話『襲撃』

「よし、体は健康そのもの。筋肉が衰える様子もなし。平均体重もクリアしているし、その後の副作用もない　おめでとう、天城夕君。君は明日をもって退院だ」

僕は診察室で、斉藤先生にそう診断された。

「ありがとうございます！」

僕はそう言つて頭を下げる。斉藤先生は何だか照れたように頭を掻いていた。

そう、僕は。

病気に打ち勝つたのだ。

「退院と言っても、通院はしなければいけないよ。一応、遺伝子操

作薬は劇薬という分類だからね」

そう言っただけの後の注意を受ける僕。しかし、僕はウキウキした気持ちの中々抜けなかった。まあそれもあるだと思っただけ。今まで治療不可能、と言われた病気が治ったのだから。

これで気持ちが浮き立たない方がどうかしている。僕のそんな様子に斉藤先生は苦笑しながら見つめていた。

他に2、3の注意を聞いて僕は病室へと戻っていった。

朝　今日は、僕にとって新たな人生のスタートと同義だ。これから、僕は今まで出来なかったことをたくさん経験できる。諦めていたことに挑戦できる。そのことがとても嬉しい。

「改めて、退院おめでとう」

「本当にありがとうございました」

僕は斉藤先生の差し出された手を握って握手した。荷物はほとんどないから身軽だ。家は斉藤先生の知り合いの家に厄介になることになっている。

僕は勢いよく病院を出ようとして 自動ドアが開いた瞬間
銃を突き付けられた。

「え？」

「ハロー」

全身を黒づくめの衣服に包んだ集団が続々と入ってくる。その中の一人が、アサルトライフルを天井に向けて乱射して威嚇する。

「御機嫌よう、諸君。テロリストのお出ました」

僕はめぐるましく展開される状況にただ困惑して。

今日の昼ごはんは何にしようかなあ、と現実逃避した。

第七話『襲撃』（後書き）

次は水曜日に投稿を予定しています。

まだ本調子ではないので、不定期気味になるかと思っています。

感想、評価等お待ちしております。

第八話『襲撃・2』

僕は何かと平穏とは無縁の人生を送るというのが運命なのかもしれない。何せ、この瞬間。この出来事が、僕の人生を180°変えてしまったのだから。

僕は今、手首を縛られた状態で捕まっていた。何とも情けない話、自動扉を出た瞬間テロリストの人質になってしまった。病院内は医師や看護師さんたちが患者さんたちを宥めているから何とか大きな騒ぎにならずに済んでいる。

「さっさと歩け」

僕は背中に当たる嫌な感触　絶対これは銃だ　に冷や汗を流しながら一同の先頭を歩かされていた。何で僕が、と疑問が頭の中をぐるぐると回っているが、質問したら問答無用で撃たれそうなので止めておいた。

テロリストの数は5〜6人で、4人ほど上で見張りをしている。残りは僕を連れて、病院の地下に向かっていた。どうやら、この病院は全国でも最大規模らしく、地下には貴重な物や危険な薬物が数多く保管されているらしい。テロリストたちはそれを狙っているようだった。

歩いている間にはみんな無言で、不気味な雰囲気醸し出している。顔を隠しているのはいつの時代でも変わらないのだな、と変なところで感心した。

と、ついに最深の階に到着した。見上げるほどの大きさがある金属製の扉。その横には電子キーがあつて、パスワードを入力しないと開かないようになっていようだ。

こんな堅固な扉をどうやって開けるんだろうか、爆弾とか？と、考えていると、突然ピー、と電子音が鳴る。そして、重々しい音を響かせながら扉が開いていく。僕は呆然とその光景を眺めていた。

一方、上の階では病院内にいる人間を一所に集めていた。その周りを囲むようにテロリストたちが監視している。

「まだかな、レオさんたち。退屈しちまうぜ」

「そう言つな、あの人は今日の作戦が重要なものだ、って言つてた。俺たちは与えられた役割を文句を言わずにやったらいいんだよ」

そう手に銃を保持したテロリストたちは退屈そうに会話をしていた。なにせ、ここにいるのが無力な一般人なのだ。気を緩めるのも仕方がなかった。

しかし。

一瞬の油断が命取りになる、というのはいつの時代、どこでも一緒であり。

ようするに、彼らは。

ただひたすらに運が悪かった。

「ん？」

テロリストの一人が、何か違和感を覚えた。どんどん、自分の影が大きくなっているような。そう思い、上を見上げる。その瞬間、ガラス張りの天井を突き破りながら、人影が落下してくる。

ガシャアアン！と、ガラスが割れる独特の音がフロアいっぱいに響き渡った。その場にいる人々は悲鳴を上げながら頭を庇う。

テロリストたちは、咄嗟に起こった出来事に虚をつかれ、一人が天井から降ってきた人影に踏みつぶされた。

巨漢の侵入者は、踏みつぶした一人を顧みることなくゆっくりと立ち上がる。その時、やっと意識が追いついたテロリストたちはアサルトライフルを構えた。

その素早さは、確かに鍛えられた者特有の無駄のない動きで、流石といえるものだろう。しかし、こういう時は何かと咄嗟には気付きにくいものだ。

「後ろが留守だぞ、ヒヨツ子」

「え？」

ドサリ、と人が倒れる音。侵入者の近くにいた一番若い一人が、後ろを振り向く。そこには、刀を持った針金のような細身の男と、気絶した仲間たちがいた。それを確認すると同時、彼は衝撃と共に意識を刈り取られた。

「これで、ここにいるのは全員か？」

大柄な男がその場にいた医師に問う。

「い、いや、もう数人が地下に。人質が一人いる」

「ビックフット」

針金のような男は腰に差した鞘に刀を収めながら声をかけた。ビックフットと呼ばれた男は頷き、その場にいた人たちに避難するよう告げ、彼らは地下に向かう。

天城夕の人生が大きく変わるまで、もう少し。

第九話『屈折』

僕は、手も触れていないのに勝手に開いていく巨大な金属扉を呆気にとられながら見つめていた。そんな中、中から魚面をした中年の男が小型のアタッシュケースを持って出てきた。どうやらそれが今回の目的の物だったようで、リーダーと思しきテロリストがそれを受け取る。

僕は何が何だか分からずに突っ立っていた。が、テロリストの一人が何かに気が付いたように顔をピクリと動かした。

「レオさん、こちらに二人、向かっているようです」

「ふん、奴らか。面倒だな…」

片方の言う通りなら、誰かがこちらに向かってきているみたいだ。どうやってそのことに気付いたんだろう、と不思議に思っていると周囲から視線を感じた。

顔を上げるとテロリストたちが全員僕を見ている。

「えー…と、何か？」

猛烈に嫌な予感がした。

先程の二人組は現在、階段を使って地下に向かっていた。勿論、エレベーターをしようと思ったが何故か使用不可になっていた。恐らくテロリストたちが自分たちしか使用できないように小細工をしたのだらう。

息を乱すことなく二人は目的の最下層に辿り着いた。そのまま一本道を駆け抜ける。もうすぐ集団がいる扉付近まで来た瞬間、何か鋭い物がマシンガンのように二人へと襲いかかった。

カカカカ！と、軽快な音を立てて床や壁に突き刺さる音。その針の嵐が収まる。そこには、二人を囲むように乱立する針の山と、刀を抜き放った体勢で立つ男。彼の後ろにはビクフットと呼ばれた巨漢がいたが、二人には一本たりとも針が刺さってはいなかった。

彼らの前には、四つん這いになってこちらに向いているテロリストと、その一味。そして、手を拘束された状態で壁のように前面に立たされている天城夕がいた。

僕の目の前には、信じられないような光景があった。テロリストの一人がスッと前に出て四つん這いになったかと思うと、背中から

針が乱射された。妙にデカイ図体だな、と思っていたけど、マシンガンでも何か背負っていたのだろうか？と思ったほどだ。けれど、発射されている最中、いつさい銃撃音がしなかった。

何か、僕が生きていた時代より遥かに進歩した兵器なのかもしれない。さらに信じられないのが、あの針の嵐の中、刀で針を全て切り落とすなんて芸当だ。いつの時代だ、とつつこみたくなる。

「細身の隻腕剣士…噂通りの腕前だな」

と、リーダーの男がふと言葉を漏らした。

「実に惜しい。その腕前がありながら、？人間？に手を貸すなど…面汚しも良い所だ」

「某への悪口結構。我らはお前たちとは志が違うのだからな」

細身の剣客はテロリストたちを睨みつけながらリーダーが手に持つアタッシュケースに目を向ける。

「やはり…それが狙いだっただか。？遺伝子改変薬？。それほど危険な物を、お前たちに渡すわけにはいかん」

「？遺伝子…改変薬？？」

僕は聞いたことのない薬品の名前に首を傾げた。遺伝子操作薬とはまた別物なんだろうが。

しかし、僕がそんな呑気なことを考えている余裕は無かった。僕は人質なのだ。僕は無理やり壁のように突き出される。

「退け。さもなくばこの小僧を殺す」

ああ、やっぱり！？現実逃避して考えないようにしてたのに！

二人組はジリ、と対峙する。彼らもこのままだったら手も足も出ないだろう。

（ああもつどうすれば……！！）

その瞬間。

ズドオオオオン……！！と、腹に響く音と共に強烈な揺れが僕らを襲う。

全員その場で体勢を崩す中、スピーカーからまた別の声が聞こえてきた。

『ああ、まったく面倒くさい……俺さっきまで寝てたんだぜ？それを叩き起こしちゃう、普通？え？繋がってるって？バカ、それを先に言え！まったく』

「……」

『あー、あー。病院内にいるテロリストどもに告ぐ。さっさと武器を放り捨てて投降しろ。今ならかつ井おごってやるから』

『再度警告する。投降しない場合……テメェら全員ブチ殺します、以上』

「…警告って言つより、脅迫じゃん」

僕の言葉が、たぶん全員の内心の言葉を代弁していたと思うよ、
うん。

第九話『屈折』（後書き）

感想、ご指摘じゃんじゃんお待ちしています!!

第十話『逃避』

僕は先程流れた警告（？）に驚きながらも咄嗟に足を動かした。

「あつ！」

テロリストの持っていたアタッシユケースを蹴り飛ばして僕も二人組の方に避難する。ほんの一瞬、たった一つだけのアクションで状況は逆転した。

「よくやった、坊主」

巨漢の人はそう言いながら僕の手を拘束しているロープの戒めを解いてくれた。テロリストたちは僕の行動に歯噛みしながら物凄い形相で睨んでくる。巨漢の人は地面に倒れているアタッシユケースを僕に手渡し、僕の目をじっと見つめながら口を開いた。

「坊主、俺たちはここから離れられん。だから、これを持って逃げてくれ。地上に出たら、上にいる連中がお前を保護してくれるはずだ」

僕は怖気づきそうになったけれど、僕の心の中まで見通すような目に不思議と勇気づけられた。僕は決心を固めて、頷く。

それでこそ男だ、と背中を叩かれて僕はアタッシユケースを抱えただま駆け出した。

「随分と……あつさり行かせてもらえるとはな」

巨漢の男　　ビックフットは内心意外な面持ちで疑問を漏らした。

実際、目の前にいるこの組織はとにかく荒っぽい連中だ。それこそ、関係のない人々の血が流れようと何も両親を痛めない程には。

だからこそ今、目の前で剣呑な気配を漏らしている連中に違和感を抱いた。

「ああ、そうだな」

連中のリーダー格、レオと呼ばれていた男は何ともないように肯定する。ビックフットはますます分からなくなって眉をひそめた。

「だが　俺たちの内、誰も動いてはいない、という訳ではない」

その言葉に、ビックフットは何かハッと気が付いたようだったが、もう遅い。

「数の上では俺たちの方が有利。この状況では援護にも行けない俺たちの勝ちだな」

レオは、ニヤリと口角を釣り上げた。

僕はアタッシューケースを抱えたまま階段を上り続けた。カンカン、と音を鳴らしながら一心不乱に足を動かす。と言っても、僕は病み上がり甚だしい身の上だ。

正直、息も絶え絶え、足の筋肉はこれでもかと言うほどに鈍痛を脳に訴えてくる。しかし反面、体を動かしている、ということに自然に笑みを漏らす自分もいた。

「…僕はMか」

そう苦笑しながら垂れてくる汗をぬぐう。僕は息を整えて、また走り始めようと一歩踏み出した。

その時。

「なら鞭打ちなんてどうだ？」
スパンキング

不意に聞こえた声と同時に、僕はものすごい衝撃を背に感じて吹き飛んだ。

「ッ…!？」

声にならない声を上げながらゴロゴロと階段を転げ落ちる。全身を襲う激痛に顔をしかめながらも顔を上げた。

すると。

誰もいなかったと思われた空間から、スウッとぼやけた輪郭が徐々に現れる。そこには、魚面をした男が立っていた。

「何、が」

僕は痛みで混乱した頭をフル回転させて状況を飲み込もうと奮闘する。

だが、状況はさらに混沌としたものへと変化した。

ジュオ…と何かが溶ける音。それと同時に、鉄製の扉がはじけ飛ぶ。そこには

「あつれー？何この状況」

ライダースーツのようなぴちつとした服装をした男の姿。

「取り敢えず　殺っちゃっていいよね」

そう言つて、30センチはあろうかというライターを構える。

それから漏れ出る炎が、何かを暗示させるかのように揺らいだ。

第十話『逃避』（後書き）

今回から間を区切るために を付けました。

読みやすくなるように、と付けてみたのですがもし前の方がいい、とおっしゃられる方がいたら感想を頂けると参考になります。

その他の感想などもお待ちしておりますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0818z/>

赤い鳥症候群（仮題）

2011年12月17日23時50分発行